

# 言語表現と意味認識について

## — 認知論的視点から —

松 中 完 二

### 0. はじめに

我々は、日常、言葉を用いて意思疎通を図り、思考し、生活している。しかしながら、その言葉自体も、極めて抽象的な手段にすぎない。言葉は具体的な事象や事物のみならず、人間が心内において有している広範かつ抽象的な心象をも伝える道具である。また語彙も同様に、具体的な事象や事物を示していると同時に、そうした抽象的な心象を表わす最小の単位である。人間が言葉を理解するという現象は、こうした言葉や語彙が表わしている対象に関する知識によって形成され、相手が持っている知識と自分自身が持っている知識、更にはその言葉が指し示す現実世界での対象物との知識を対応させることで成立するものである。また、人間は、言葉やそれが表わしている具体的な対象物で直接そのものの意味を理解しているのではなく、概念という抽象的な媒体を通して理解を促進している側面も多い。

本稿では、我々のこうした意味認識とその具体的創造物である言語表現との相関について論考する。

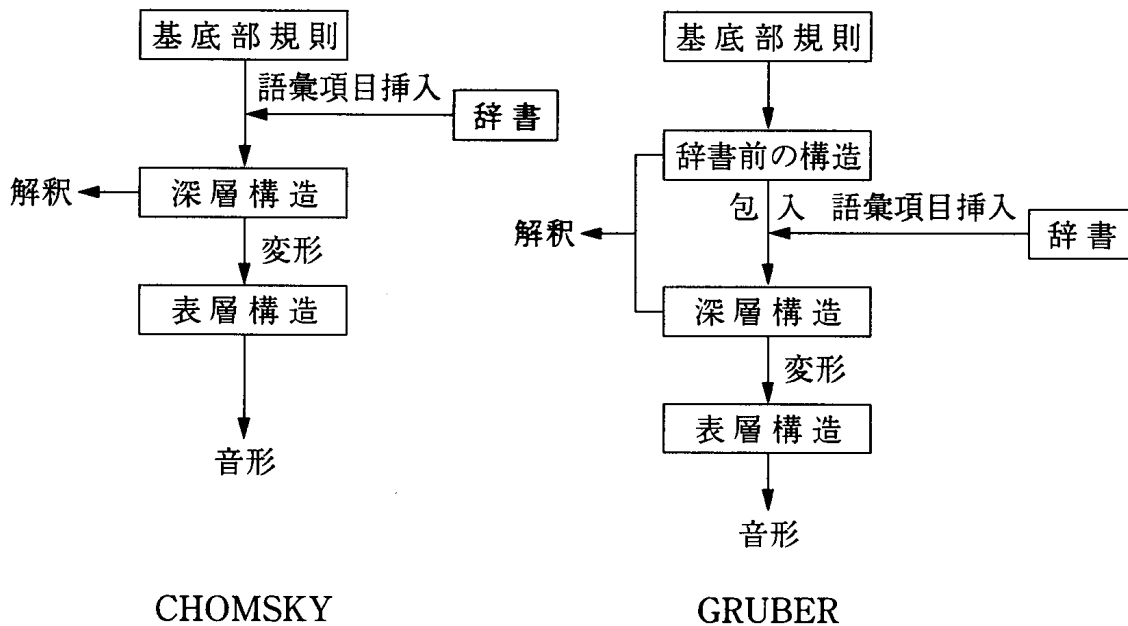
### 1. 先行研究

言葉の創造性やその理解のメカニズムは、常に言語学の研究対象であった。そして構造主義言語学においては、Chomsky(1965)が“文法

(grammar)”という枠組みで深層構造という規定を設け、文構造の解明を試みた部分である。Fillmore (1966) はそれを“格 (case)”という枠組みで捉え、Nida (1969) はそれを“核文 (kernal)”という枠組みで捉えようとした。しかしこれらはどれも文構造の統語規則を解明するもので、人間の認知構造から想起される心象と認識と言語表現の関わりを明らかにするものではなかった。また、「辞書」という言葉についても注意が必要である。通常、言語学の用語としての「辞書」は、我々の目に見え、手に持つことが出来る、英和辞書や国語辞書の類のような、本の体裁を取るものではない。それは、我々の心内のメカニズムにおいて、言語生成に関わる心的操作を行なう機構を指している。例えば構造主義言語学で言われた“辞書”は、人間が心内に有している文法構造を生成するための能力、すなわち変形規則を助けるための語彙知識を指している。

こうした変形規則と辞書の関係を「包入」という枠組みで最初に理論化したのはGruber (1965) である。Gruber は Chomsky の示した生成変形文法のモデルの中にこの「包入」という枠組みを設け、その語彙挿入の過程と共に、人間の有する言語の辞書前の構造を示した。Chomsky のモデルでは、まず「基底部規則 (base rules)」によって派生した構造に「語彙項目挿入 (lexical insertion)」が行なわれ、その結果得られた「深層構造 (deep structure)」に対して「変形 (transformation)」が適用されて「表層構造 (surface structure)」が生じるという過程を取る。これに対してGruberのモデルでは、「基底部規則」から「辞書前の構造 (pre-lexical structure)」が派生し、この段階で語彙挿入が行なわれ、その結果「深層構造」が派生し、その後「変形」が加えられて「表層構造」を生成するというものである。こうした Chomsky と Gruber の語彙挿入に対する辞書の扱いと文生成の過程は、図1のように示され得る。

図1



(池上嘉彦『意味論 意味構造の分析と記述』 p.194.)

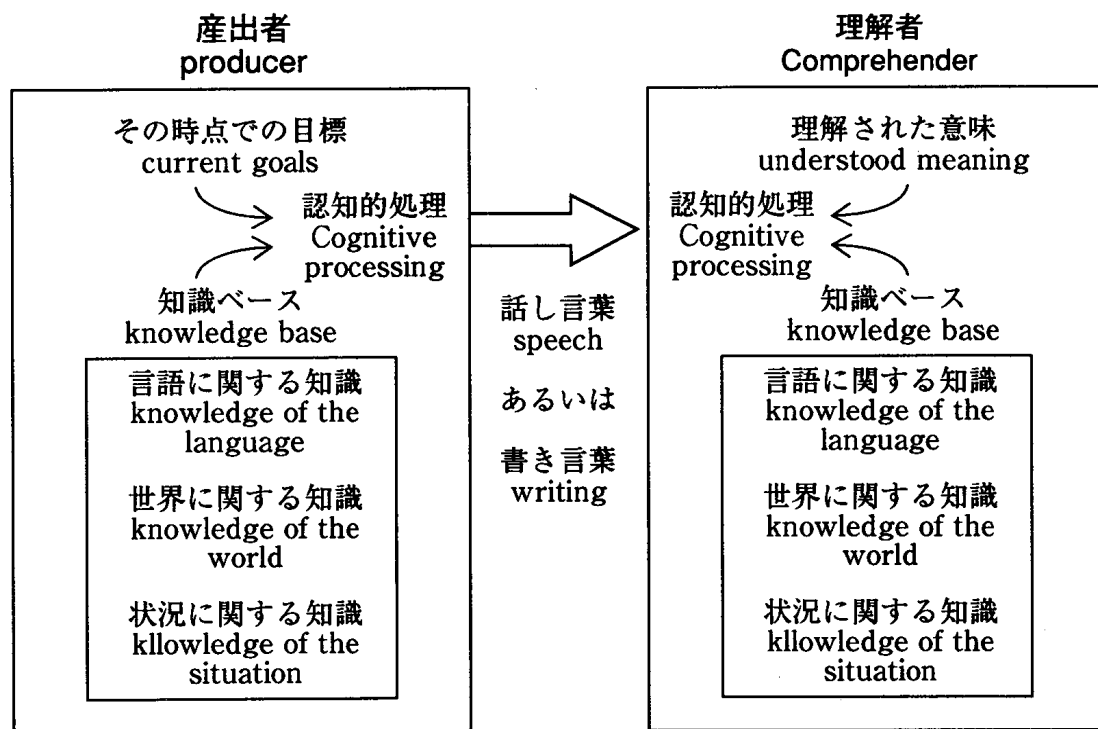
これら二つのモデルは、「解釈(interpretation)」に関して、Chomskyのモデルでは「深層構造」に対して行なわれるとするのに対して、Gruberのモデルでは「深層構造」のみならず「辞書前の構造」の二つに関係することで行なわれるという点で異なる。しかし「表層構造」に対して「音韻論規則(phonological rules)」が適用されて「音形(phonological form)」が生成されるという点では同じである。そしてこれらは、「深層構造」の生成という部分での語彙挿入のための辞書という点で、辞書そのものの概念は同一のものである。

しかし認知的な視座に立つ辞書、とりわけ認知言語学における辞書とは、こうした変形生成文法における語彙挿入を助けるための語彙知識のことを指すものではない。それは、我々の認知構造において言語表現とそれに伴う認識を生み出す共通の心象といったものを指す。それは言語表現とそれにまつわる何らかの共通の意味認識を我々に喚起させながら、同時に意味を形成する。そしてそれは語の多義構造に内在する共通の観念の認識や同

音異義を区別する役割をも担う。またそれは、我々の行なう言語活動を支えるものでもある。それは言語以前の認知段階の漠然とした概念の塊であり、それ故にその記述法は視覚的、かつ感覚的なものにならざるを得ない側面が強い。認知言語学でそうした我々の認知構造を説明するために、ランドマークやトラジェクター、ドメインといった概念が用いられるのはそのためである。

また一方、人工知能の分野で言語活動に伴う意味解釈という現象を解明しようとした Winograd (1983) は、人間の意味認識を「知識依存性」という側面に焦点を当て、図2のように説明付ける。

図 2



(Winograd, T. *Language as a Cognitive Process*. p.14./

阿倍純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五『人間の言語情報処理』p.6.)

これは、言語を産出し理解する過程を、知識を適用する過程として捉え、発話者が言語表現を通して表わす全ての知識と同一の知識を受信者が心内

において再生する過程を示している。すなわち、発話の産出者 (producer) が、心内に抱いている意図や目標 (current goals) を話し言葉 (speech) あるいは書き言葉 (writing) として表出するためには、認知的処理 (cognitive processing) という過程を通してのみ行なわれ得るというものである。そしてその認知的処理においては、発話の産出者の知識ベース (knowledge base) に記憶されている様々な知識の利用によって、この認知的処理が支えられる。また、聞き手あるいは読み手となる理解者 (comprehender) は、産出者から与えられた言語表現更に対して、今度に自分自身の有する知識ベースに支えられた認知的処理を施し、そこから言語表現に付与された意図や意味を導き出す。そしてそれが双方において等価な認識に達した場合に、コミュニケーションが成立するということである。これは、田中茂範・深谷昌弘 (1998) による会話の状況理論と、奇妙な一致を見せる。<sup>1)</sup>

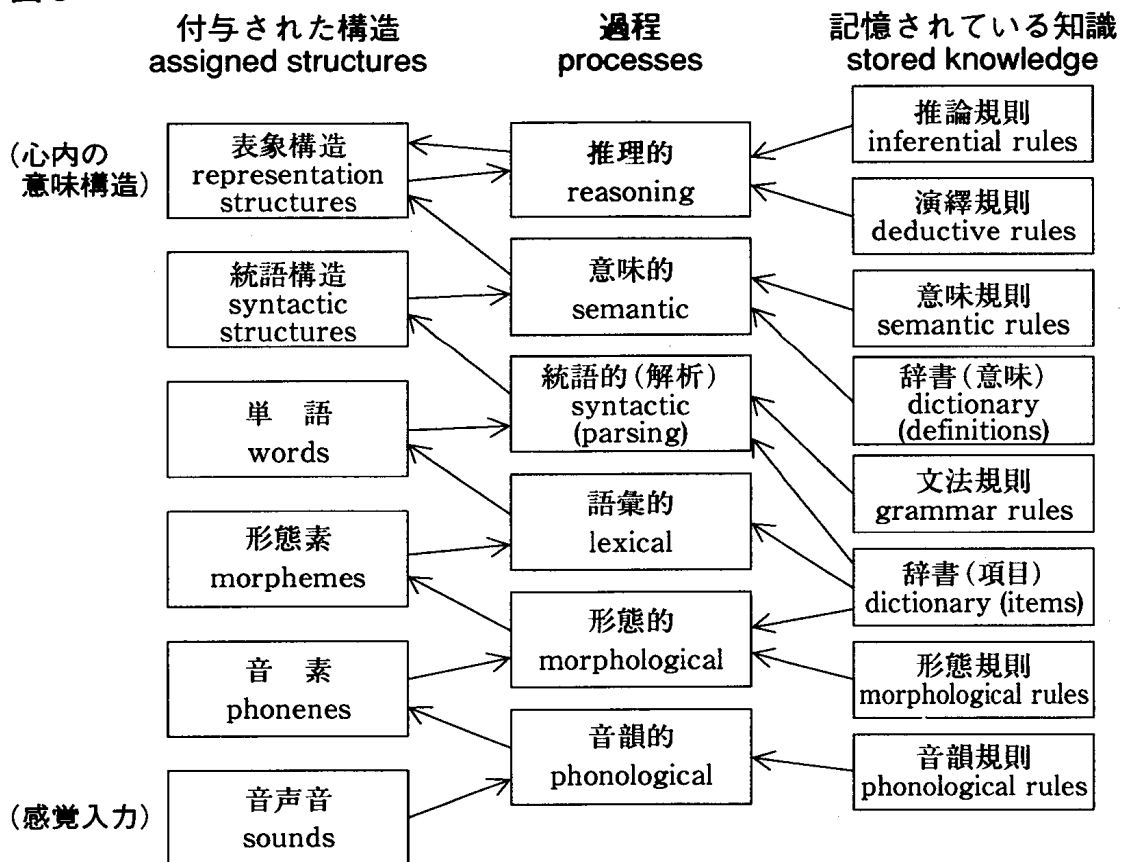
またWinogradは、こうした言語理解の過程で用いられる認知的処理を支える知識体系を図3のように示す。

そしてここで最終的に得られる語としての「表象構造(representation structures)」が、その現実世界における文脈や場面といった要因を受けて、最終的な意味認識の決定が行なわれる。このことから、認知主義の視点で往々にして用いられる辞書という概念は、意味のネットワークを構成し、そしてその認識を助ける言語以前の概念の認知構造であることが分かる。こうした、我々の心内における語の選定作業と辞書の関係は、図4のように表わされる。

また、意味のネットワークを構成するということは、構造主義言語学で取られた語の上下関係や成分分析といった要素も自ずとそこに内包されることを意味している。それはまた連想のメカニズムをも生み出し、多義を形成する根底の意味概念としても働く。

認知言語学では、各人が各論を展開しているものの、そこで問題となるものは、こうした我々の認知構造において形を持たずに共有され、共通の

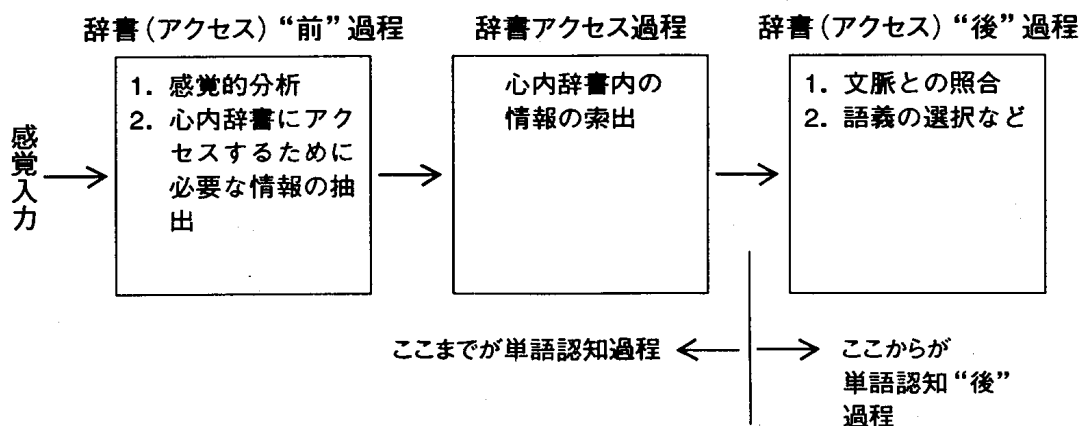
図 3



(Winograd, T. *Language as a Cognitive Process*. p.17./

阿倍純一・桃内佳雄・金子康朗・李 光五『人間の言語情報処理』p.7.)

図 4



辞書(アクセス)“前”過程, 辞書アクセス過程, 辞書(アクセス)“後”過程

(阿倍純一・桃内佳雄・金子康朗・李 光五『人間の言語情報処理』p.29.)

意味認識を助けている心内辞書の解明である。

## 2. NODEにおける意味の有契性の呈示

こうした態度は、辞書の意味記述にも採用され初めている。例えば *The New Oxford Dictionary of English (NODE)* (1998) では、多義構造を解説するために、最初に中核となる意味 (core meaning) を示した上で、次いで派生義 (subsense) を示すという記述法を取る。この中核となる意味こそ、我々の認知構造における、意味解釈のための心内辞書に他ならない。この中核となる意味について、同辞典は次のように説明している。

“Core meanings represent typical, central uses of the word in question in modern standard English, as established by research on and analysis of the British National Corpus and other corpora and citation databases. The core meaning is the one that represents the most literal sense that the word has in ordinary modern usage. This is not necessarily the same as the oldest meaning, because word meanings change over time. Nor is it necessarily the most frequent meaning, because figurative senses are sometimes the most frequent. It is the meaning accepted by native speakers as the one that is most established as literal and central.

The core sense also acts as a gateway to other, related subsenses. These subsenses are grouped under the core sense, each one being introduced by a solid square symbol.

### CORE SENSE

### subsense

### COCOON

a silky case spun by the larvae of many insects for protection as pupae.

■ a similar structure made by other animals. ■ a covering that prevents the corrosion of metal equipment.

■ something that envelops or surrounds, especially in a protective or comforting way: a cocoon of bedclothes | figurative a warm cocoon of love.

There is logical relationship between each subsense and the core sense under which it appears. The organization of senses according to this logical relationship is designed to help the user; not only in being able to navigate the entry more easily and find relevant senses more readily, but also in building up an understanding of how senses in the language relate to one another and how the language is constructed on this model."

(*The New Oxford Dictionary of English*. p.IV.)

“中核的な意味とは、ブリティッシュ・ナショナル・コーパスにおいて調査、分析が行なわれた言語資料と引用のデータベースに基づき、現代の標準的英語における典型的かつ中心的な使用法を表わしている。中核的な意味とは、現代、一般に用いられる場合における最も文字通りの意味を指す。これは、必ずしも最も古い意味ということではない。何故なら、意味は時の変遷と共に変化するからである。これはまた、必ずしも使用頻度の最も高い意味ということでもない。時によっては、比喩的意味の頻度が最も高い場合があるからである。中核的な意味とは、英語の原話者たちが文字通り、中心的な意味として確立されているということを認めている意味に他ならない。

中核的な意味はまた、派生義との関連において、他の意味への扉の役目をも果す。そこでの派生義は、互いが一つの確固とした概念の結び付きによってつながりを有し、中核的な意味のもとで集団を形成する。

#### 繭

中核義

多くの昆虫の幼虫によって紡がれた、さなぎの時の保護の役割りを果す絹状の容器物

派生義

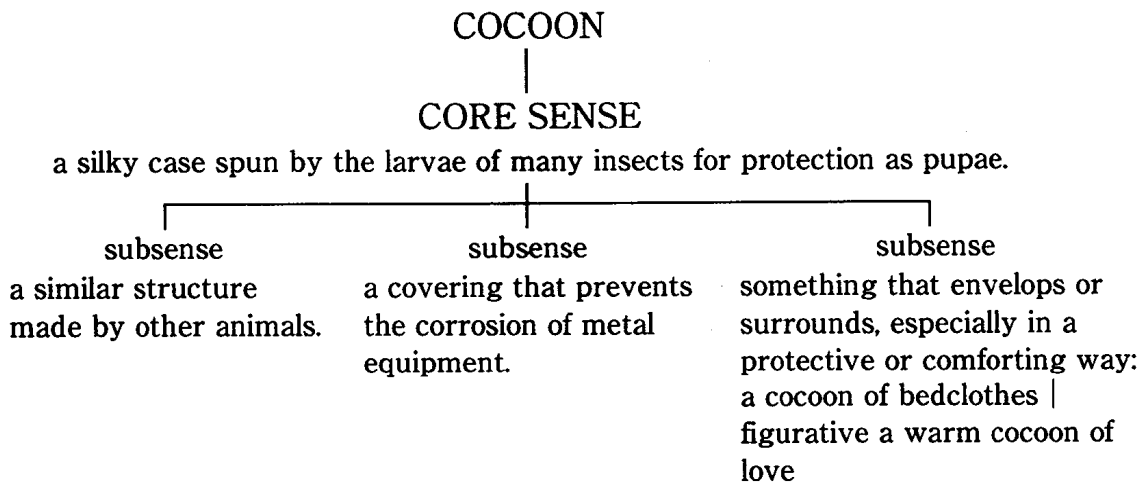
■他の動物によってつくられたそれと類似する構造物 ■金属の腐食を防ぐための防腐物 ■抱括したり囲ったりするもの、特に保護や心地よさを与えるもの:布団の繭 | 比喩的 暖かい愛の繭

中核的な意味とその派生義の間には、論理的な関係が見られる。ここで、この論理的な関係に基づき派生義を組織化したのは、本辞書の利用者にとって、検索作業の軽減という配慮のみならず、英語の多義構造がどのように関係づけられており、また英語という言語がこうした多義構造に基づいてどのように構成されているかを理解してもらいたいという配慮故のことである。”

(松中訳)



更に同辞典は、その中核的な意味を基にして、そこでの何かしら共通する意味概念のネットワークから形成される多義構造の派生義について、次のような意味の樹形図を用いて説明している。



(*The New Oxford Dictionary of English*. p.IV.)

これまで、語の多義性を誘発する原因については二つの意見があった。それは言語の「恣意性 (arbitrariness)」と「有契性 (motivation)」である。

言語の「恣意性」は Saussure (1916) にその端を発する。Saussure は、言語の恣意性について、言語においてある特定の形態がある特定の意味と結び付くのは、単に社会的慣習の一部としてそのように決定付けられているからにすぎないと述べる。この原理は、言語における多義性を無制限に許容する要因として働く。すなわち、語を構成する形態と意味とは何らかの理由によって結び付けられるのではないとすればその語が新しい意味を獲得していく際にその妨げとなるものは何もなく、従って無尽蔵に新しい意味を獲得していくことが可能になる。しかも、それが本来結び付いていた指示物の意味とどれだけ離れていても構わないことになる。例えば、馬が馬という名前と呼ばれるのは偶然の社会的決定にすぎず、犬や猫や船や飛行機をも馬という名前と呼ぶことが可能になるわけである。多義性の構造が恣意的であるとする考え方に従えば、こうした無秩序な意味の獲得と

増幅を生み出す。

一方「有契性」という原理は Ullman (1962) に端を発し、それは「恣意性」に見られる傾向を阻止する方向に働くものである。「有契性」とは、特定の語が特定の意味を担っていることに何らかの理由があるとする考え方である。これは更に、音的な有契性、形態的な有契性、意味的な有契性の三つに分類される。多義構造の創出という問題でその直接的な理由となるのは意味的な有契性である。意味的な有契性とは、ある語に特定の意味は、その同一の語の他の意味と、何らかの共通する意味上の関連性が存在しているためであるとする考え方である。意味的な有契性は、ある語の意味から他の意味が新しく派生される場合、原義と転義との間には何らかの共通する意味概念の連想関係が存在しているためであるという姿勢を取ることになる。

このように、原義と転義の派生関係が有契的であるということは、ある特定の語と結び付き得る意味に何らかの方向性を与えるものである点で、ある特定の語と結び付き得る意味に何ら制限を加えることのない恣意性という考え方に対して正反対の原理で働くものである。

### 3. 意味の有契性と意味認識

そして現在の認知意味論が取る立場は、言語の有契性の立場である。それは、プロトタイプ意味論の「語は何らかの核となる意味を有し、語義が少しずつずれていても互いに関連し合い、一語で表わされ得るような意味のネットワークを構成している」という基本原理にも見ることが出来る。またそれは、プロトタイプ意味論から派生したネットワーク理論においても同様である。またこうした態度は、多義のみならず心象の投影結果としての言語表現の記述を可能にする側面を有している。そしてこうした共通の意味認識に支えられ、多義を生み出すような概念構造こそが、心内辞書

であり、言語表現を形成する認知構造である。

我々の意味認識を形成するものが、表面的な言語表現だけではなく、場面や文脈、更には発話者の意図や感情的側面といった諸々の要因によって決定付けられることをこれまで見てきた。そして心象とそれを表わす言語表現が常に同一のものではなく、そこには恣意的な要因が強く働く。一方でその意味認識は、何らかの有契性によって形成される。こうした心象と言語表現の不一致という問題について、古くは Jespersen (1924) にその指摘の原型を見ることが出来る。

この問題について、Jespersen は次のように述べている。

“In all speech activity there are three things to be distinguished, expression, suppression, and impression. Expression is what the speaker gives, suppression is what he does not give, though he might have given it, and impression is what the hearer receives. It is important to notice that an impression is often produced not only by what is said expressly, but also by what is suppressed. Suggestion is impression through suppression. Only bores want to express everything, but even bores find it impossible to express everything. Not only is the writer's art rightly said to consist largely in knowing what to leave in the inkstand, but in the most everyday remarks we suppress a great many things which it would be pedantic to say expressly. “Two third Brighton return” stands for something like: “Would you please sell me two third-class tickets from London to Brighton and back again, and I will pay you the usual fare for such tickets.”

(Jespersen, Otto. *The Philosophy of Grammar*. pp.309-310.)

“およそ言語活動において、われわれは表現 (expression) と抑止 (suppression) と印象 (impression) の三つを区別しなければならない。表現とは話し手の与えるところのものであり、抑止とは、話し手の興えない（しかし興えようとすれば興えうる）ものであり、印象とは聞き手が受けるところのものである。この場合留意すべき大切なことは、印象というものは、はっきりと言葉で表現されるものによって生ずるのみならず、抑止されたものによっても生起することが多いという点であって、抑止による印象が暗示 (suggestion) である。一切を表現しようとするのは退屈な連中だけだが、彼らにしても一切を表現することが不可能であることを知るであろう。文章のうまさは、インクびんの中身をどれほど使わずにとっておくべきかを

知ることに大いに存するといつてよく、また当り前の日常の言葉づかいにおいても、はっきり言葉で表現してはしかつめらしくなるような多くのことを、われわれは実際に抑止しているのである。たとえば、

Two third Brighton return. (ブライトン往復3等2枚)

は

Would you please sell me two third-class tickets from London to Brighton and back again, and I will pay you the usual fare for such tickets.

(ロンドンからブライトンまで行って歸るための三等乗車券を2枚發賣してほしい。その上で私はあなたにその乗車券の規定料金を支拂いたい)

というような内容にあたる。” (半田一郎訳『文法の原理』pp.453-454.)

Jespersen のこの指摘は、我々の日常における自然言語の発話の不完全性にもかかわらず、そこから適切な意味を抽出し、有効な伝達が可能な現象を説明付けるものである。

#### 4. 事例検証

またこうした意味と言語表現の認識は、同一の言語表現でありながら様々な意味解釈を生み出す現象でもある。例えば、最も簡易な言葉の例として、五十音図の最初の音でもある「あ／あー」という言語表現と、そこで得られる意味認識について取り上げてみる。国語辞書における意味記述は、おおよそ次のようなものである。

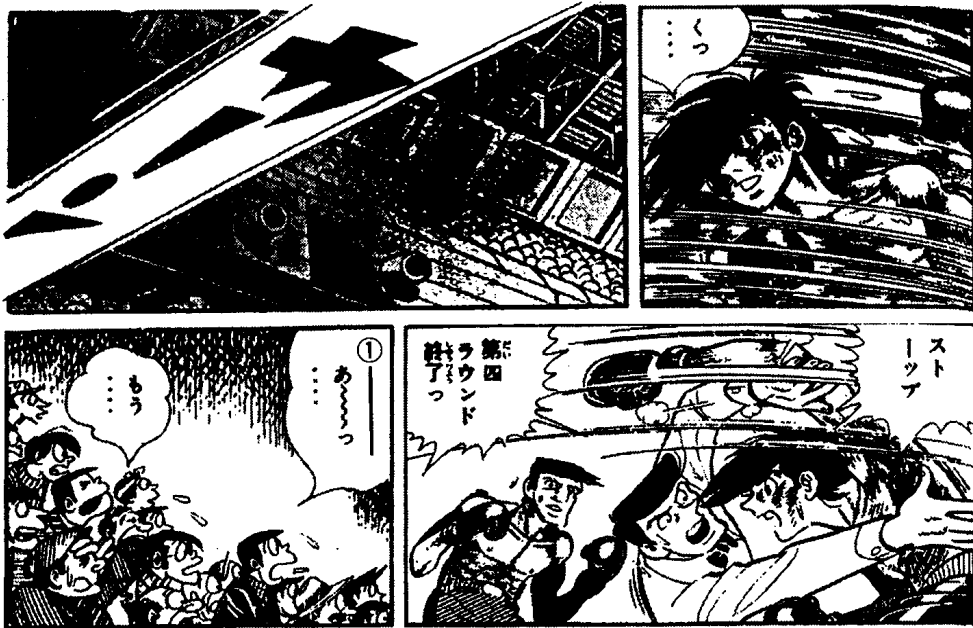
あ〔感〕①何かを急に思い出したりしたときに思わず発する語。あっ「ー、しまった」

②呼びかけに用いる語。「主人とーと言え、郎等さとお出づべき体なり」〈盛衰記・六〉③応答に用いる語。はい。〔後略〕 (小学館『大辞泉』p.1.)

しかしこの定義が決して十分でないことは明らかである。言葉の意味認識は、あくまでその場面や文脈、そして発話者の表情や心的様態といった

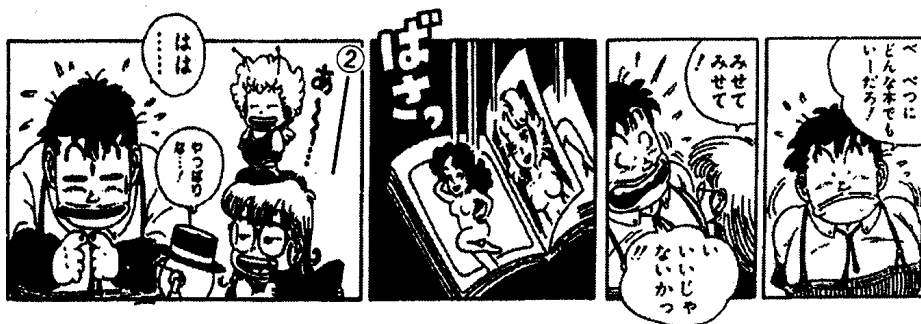
要因により決定付けられ、それ故、この定義意外にも様々な異なる認識が存在する。その例を、a)～d)の漫画から見てみる。

a)



(高森朝雄・ちばてつや『明日のジョー』第10集、pp.294-295.)

b)



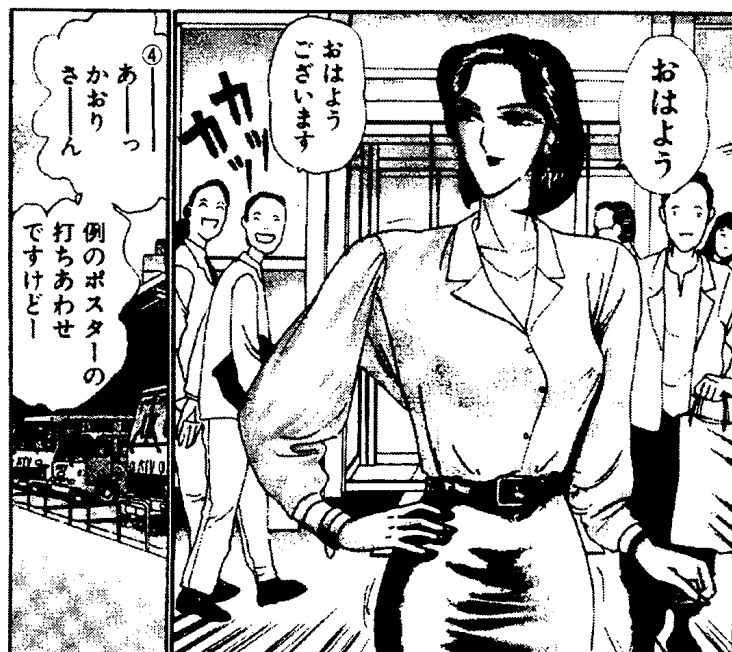
(鳥山明『Dr.スランプ』第2巻、pp.110-111.)

c)



(井上雄彦『バガボンド』第1巻、p.18.)

d)



(安達 哲『お天気お姉さん』第3巻、p.50.)

a) は、ボクシングの試合がいいところでゴングに遮られたことに対する言語表現である。この場合、①の言語表現から我々は、これからという時に水をさされたことに対する無念や失望といった意味認識をするであろう。

b) の②からは、場面の要因を受けて、相手に対する軽蔑や嘲りといった意味認識をするであろう。

c) の③からは、不意を突かれた驚きや斬りかかる相手の太刀をかわす際のかけ声といった意味認識をするであろう。

d) の④からは、用事を思い出して相手を呼び止めるための呼びかけや、会社の華である女性に対する感嘆や憧憬といった意味認識をするであろう。

ここでの言語表現としての音形は、いずれの場合も同一である。しかし我々は、先の解説で見たように、それが用いられている場面や文脈の中で、それぞれそこに最も適するような意味解釈を行なっている。このことは、語や文の意味がゲシュタルトの構成要素として全体の解釈を生み出しながら、全体の構成の中においてこそ個々の言語表現の意味が有効に認識されることを説明付ける。同時にそれは、我々の意味認識が言語表現だけによるものではなく、背景的な要因によって強く特徴付けられるというこれまでの私の主張をも証明するものである。<sup>2</sup>

## 5. 言語表現と意味認識

こうした、同一の言語表現でありながら、そこで様々な意味認識が可能な現象について、Stevenson (1944) は「傾向 (disposition)」という枠組みを用い、次のように説明付ける。

“The meaning of a sign, in the psychological sense required, is not some specific psychological process that attends the sign at any one time. It is rather a adispositional property of the sign, where the response, varying with varying

attendant circumstances, consists of psychological process in a hearer, and where the stimulus is his hearing the sign."

(Stevenson, C.L. *Ethics and Language*. p.54.)

“記号の意味は、要求されている心理学的意義においては、あるときにその記号に伴うある特定の心理的過程ではない。それはむしろその記号の傾向的性質であり、そこでは反応は、変化する付帯状況と共に変化しつつ、聞き手における心理的過程から成り、またそこでは刺激は、かれがその記号を聞くことである。”

(島田四郎訳『倫理と言語』p.73.)

また、Fries (1954) は次のように述べ、意味認識の場面依存性を説明付ける。

"In general, for linguists, the 'meaning' of an utterance consist of the correlating, regularly recurrent sames of the stimulus-situation features, and the regularly elicited recurring sames of response features."

(Fries, Charles. *Meaning and Linguistic Analysis*. p.65.)

“一般に、言語学者にとって、ある発話の「意味」とは、刺激となる場面の中で、その発話に対応する形で規則的に見出される同一の特徴と、反応において規則的に見出される同一の特徴とから形成されるものと見なされる。”

(松中訳)

これらの言葉は、意味の認識と決定が言語表現よりも、その背景にある場面の中で強く決定付けられることを主張したものであるが、これらの主張は Saussure の言う *signifié*、*signifiant* という概念にさえも一種、逆らうものである。*signifié* と *signifiant* が、共に同一概念で同一指示物しか持たなければ、こうした意味認識の多様性といった問題は起こり得ない。しかし実際に、同一の言語表現から多様な認識が生じる現実には、こうした *signifié*、*signifiant* の確固たる一致は、その場面によって影響されるものであることを認識させる。

また、人間が言葉を理解するという現象は、こうした言葉が表わしている対象に関する知識によって形成され、相手が持っている知識と自分自身が持っている知識、更にはその言葉が指し示す現実世界での対象物との知識を対応させることで成立するものである。また、人間は、言葉やそれが



表わしている具体的な対象物で直接そのものの意味を理解しているのではなく、概念という抽象的な媒体を通して理解を促進している側面も多い。

このことについて、Yule (1985:97-98) は看板に書かれた“*Heated Attendant PARKING*”という文字列とその意味解釈の曖昧さを指摘している。<sup>3)</sup> Yule の指摘は、場面による連想から意味の決定がなされる例を如実に言い表している。

また、我々の認知構造における心象を言語表現へと写像した結果生成される言語表現には、何らかの不備や変化さえも生じる。そしてこれは、かつて Montague 文法において、内包と外延として指摘された問題でもある。この問題については、成瀬武史 (1978) も翻訳の視点から次のように述べている。

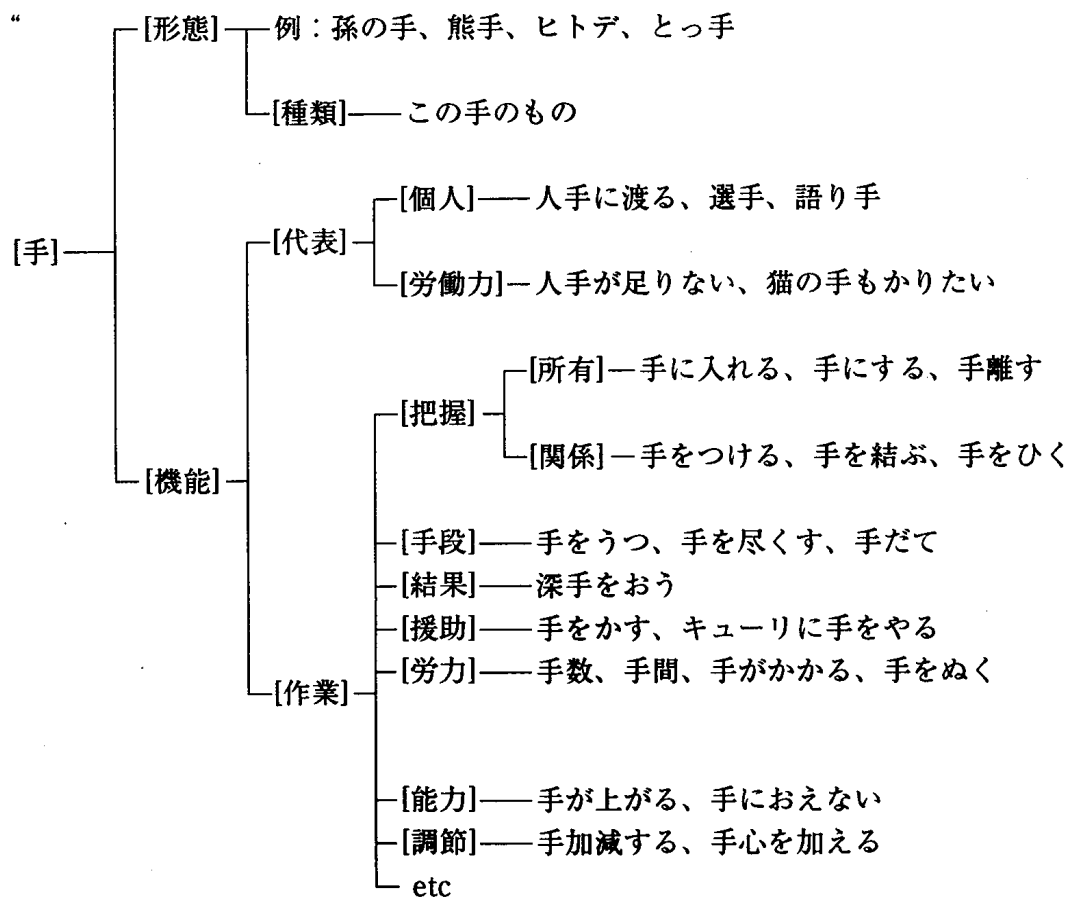
“文脈的意味も微妙な問題を提起することがある。心象 (image) を伴う語句を使用することの可否が隣接する語句によって左右される場合である。よく例にあがるのは、“*I saw the Morning Star last night*”のような文の問題性である。たしかに the Morning Star (明けの明星) は the Evening Star (宵の明星) と同様に、全く同一の金星 (Venus, Hesperus) を指示する。しかし (the) Morning (Star) は (last) night と心象の上で共起しない。いわばイメージの選択制限が働く以上、このような文が実際に原文に生じることは考えられない。したがって逆に、たとえば、“*I saw the Morning Star just above that mountain this morning*”というまっとうな文を、「私は今朝あの山のま上に宵の明星を見た」というほどの、無神経な訳文を作ることとも考えられない。しかしこの同じ英文の “the Morning Star” を「金星」と訳出することはやりかねないかもしれない。著者の用語の選択にどれほどの感情移入が伴っているかは、つねに定かではないが、小説の翻訳など、人物間の感情的なかわりが用語に反映していることが予想される場合は多い。しばしば作品全体が文脈となって心象や行動を規定していることすらあるので、いくつかの選択関係にある語句や語法が考えられるさいには、訳語句や語法の選択にも充分の注意が必要となるわけである。”

(成瀬武史『翻訳の諸相』 pp.139-140.)

成瀬がここで指摘する「明けの明星 (the Morning Star)」と「宵の明星 (the Evening Star)」の問題は、古くから言語学において、認識のずれを指

摘する好例として繰り返し取り上げられてきた問題でもある。<sup>4)</sup> 特に、形式意味論と称されるMontagueの研究に端を発する一連の文法理論<sup>5)</sup>では、こうした認識と解釈の問題が主要な論点となる。

また、同じく成瀬武史は、日本語の「手」という語を例に取り、その心象とそれを基に創成される言語表現について、次のような考察を行なっている。<sup>6)</sup>



ゆたかな連想が比喩をうみ、比喩的表現がやがては即物的に、すなわちその母胎をなす他の語句（とその指示物）の媒介をへずに、直接事物や事態を表わすようになる。[中 略] 翻訳上これらの本来外心構造をもつ語句を内心構造にとり違えると、時にたくまぬおかしみをもちこむことになる。

それは、文脈によって特定の意味をになうべき語が辞書的にもっている固有の多義性と、他の語との結合がうみだす複合語や前置詞句によって指

示される新しい概念の特異性に気づかない場合に生じがちである。いつの場合にも、即文脈的思考と選択が誤解と誤訳への防壁になるのであるが、生半可な知識がわざわざにみちびく場合が多い。

とくに後者について問題が生じるのは、人間の頭が本来分析的に働く傾向が強いことによる。いくつかの個（語）の意味を知っているさいには、無理からぬことながら、それらの個の集合（成句）は個々の意味を組合せたり、合成した意味を指示する、とわれわれは解しがちである。”

（成瀬武史『翻訳の諸相』pp.159-160.）

成瀬の「手」についての分析は、我々が何らかの核となる心象を中心に、それを言語表現へ写像することで言語表現の用法を生み出しているということをも物語るものである。

## 6. むすび

こうした論述は、言語表現が我々の根底に内在する概念構造の写像でありながら、背景要因となる場面というゲシュタルトによってその意味認識が行なわれることを如実に物語っている。

こうした人間の心内辞書内に存在する認知構造での意味理解とその言語表現による創成という問題について、松本裕治他 (1997) は次のように述べている。

“心的辞書が単語の情報の集合体であると見なし得るならば、それを構成するこの単語情報がいかなる表現形態を持っているかということが当然問題にされるべきであろう。しかしながら、現在のところ、心的辞書への接近形態に関する研究の多さと、それに呼応して提起されているモデルの多様性に比べて、心的辞書自体の表象形態についての実験的研究は十分に行われているとは言えない。

統語的知識とは別に、仮に語に関する知識に限ったとしても、各単語の意味が以下に表現されているかという問題と、語と語との関係がどのように表現されているかという問題とを含んでいる。このような観点に立てば、単語に関する知識の表現形式の解明は、その運用に関する知識、さらには

外的世界に関する知識がいかに表現されているかを解く鍵ともなり得るであろう。

そしてここで紹介した単語処理過程モデルが安定的に機能するためには、外界の情報を「圧縮」し、それを心的辞書に表現（記述）し、必要に応じて情報を「復元」するための安定機構（おそらくそれは冗長な表現形式をも含めて）を明らかにすることを促している。なぜなら、情報の「獲得」と獲得された情報の「検索」とが相互依存的であるように、情報への接近形式は接近され件作されるべき情報の表現形式と決して無縁ではあり得ないからである。（松本裕治・影山太郎・永田昌明・斎藤洋典・徳永健伸『岩波言語の科学3 単語と辞書』pp.152-153.）

ゲシュタルトの構成員としての語は、個別の意味を有しながらあくまで全体の中で意味をもち、解釈を形成する。我々は何らかの核となる心象を中心に、それを言語表現へ写像することで、言語表現のを生み出している。そして与えられた言語表現を土台としながらも、そこから更に拡張された心象を喚起し、それを更に言語表現に付与することで意味を認識し、言語表現を生成している。

言語表現とそこから得られる意味認識との相関は、認知主体としての我々から独立して形成されるのではなく、主体の投げかける視点との関連によってなされる様々な認知的解釈によって形成される。そしてそれを可能にしているのが、ゲシュタルト的要因という認知的基盤に他ならない。<sup>7)</sup>

## 注

- 1) 一連の言語活動の中での意味解釈の問題について、田中茂範・深谷昌弘(1998:27-28)は「情況」という語を用い、会話の成立という視点から次のように説明している。

“さて、会話での情況編成とは、相手の発話したコトバの配列を取り込み、情況を再編成して自らの発話のコトバの配列を形成する営みである。情況は理解の相と応答の層をもつ意味の融合態として編成される。理解の相で

は、相手の発話内容の把握だけでなく、相手の態度・意図などの把握も含めた話者状況の付度が重要となる。互いが「他者状況の付度」を包摂した状況編成をしなければ、互いの発話はチグハグとなり、会話は社会的相互行為として成立しない。このような相互的状況編成を媒介するのは、ほかならぬ互いのコトバである（表情や身振りもこの役を担うが、ここではコトバに関心を集中する）。

ところが、すでに説明したように意味づけには不確定性がつきまとう。他者状況の付度は他者のコトバを手掛かりとして、自らの記憶連鎖を動員して行なう作業である。むろん、他者の記憶連鎖を意味づけに用いることはできない。他者状況の付度は、あくまでも付度であって、他者状況そのものの再構成ではない。それにもかかわらず、どうして会話を成立させる相互的状況編成が可能なのか？

意味の不完全一致性にもかかわらず会話が成立するのは、コトバの働きに「共有の秩序性」があるためである。会話におけるコトバは、主体内では意味づけの対象となるとともに応答の意味を纏め上げ表出するメディアともなる。ここでは、コトバと意味について二つの結合関係が形成される。一つは（他者の）コトバの配列から（他者の）意味を編成する作業であり、もう一つは（自己の）意味をコトバの配列にする応答を形成する作業である。この二つは辻褄合わせを志向して、互いに引き込み合いながら状況として編成される。状況とは、こうしたさまざまな意味づけの融合的所産として主体内に編成されるのである。

さて、コトバを手掛かりとして他者状況を付度するのは、コトバが記憶連鎖の引き込み合いを整序する働きに共有の秩序性があるためである。「共有の秩序性」における「共有」には二種類の意味がある。一つは、もちろん秩序性が主体間に共有されているというという意味である。コトバは、主体間では、意味づけの相互作用を媒介するメディアとして働く。もう一つはこの秩序性が理解の相と応答の相の二つの相におけるコトバと意味の結合形成に共通している、という意味である。コトバをめぐる記憶連鎖の引き込み合は、どちらの相についても、この秩序性を充足するように整序される。コトバは、主体内では、記憶連鎖の引き込み合いを整序して意味を纏め上げるメディアとして働く。この二重の意味での「共有の秩序性」があるから、聞き手は相手のコトバが話者状況の反映だと見なすことができ、また、その状況を付度できるのである。この共有の秩序性があるから、コトバから他者状況を付度することができ、会話が成立しうるのである。”

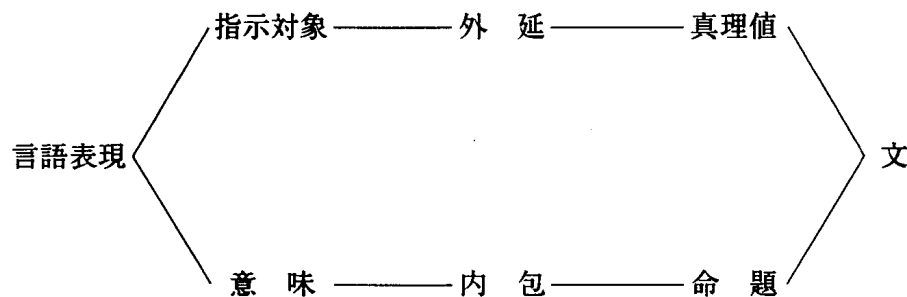
これは、言語表現は人間の意味認識を表わす一部属性でありながらも、我々の意味認識は言語表現だけでなく、その背景情報から形成されている事

実を如実に指摘したものである。こうした言語表現とそこでの意味の認知活動は、すべからく我々の認知構造において行なわれているものに他ならない。我々が日常用いる自然言語には、それこそ無限の場面やそれに伴う文脈が現われ、そこでは状況変化にも富んでいる。そのような状況変化の中で使用される言語とそこでの意味を扱うには、人間の意味認識の原理とその過程の解明が望まれることは、これからの認知言語学がになう必然的課題である。

- 2) 松中 (2004)を参照のこと。
- 3) 松中 (2003:83-84)を参照のこと。
- 4) 一般に我々は、その言語の母国語話者である限り、その言語の文の意味を知っており、それ故にある特殊な状況に関して、その状況が文の表わす内容に対応しているとかしていないとかといった判断が可能である。言語表現は意味を有し、その意味に基づいて、その表現が何を指示対象とするかということがあらゆる場合に決定される。従って、言語表現の意味とは、意味論的には内包的であり、その指示対象は外延的である。形式意味論においては、文の意味を命題、文の指示対象を真理値とする。内包と外延は、形式意味論的アプローチにおいては、モデルを用いて定義され得る性格のものであり、その定義対象は必ずしも文とは限らず、他の多くの言語表現が内包と外延を定義されることになる。

このことは図5のように示される。

図5



そして例えば、この考えに立つと、

- (1) A plane is a plane.
- (2) Mt. Fuji is Mt. Fuji.
- (3) The Evening Star is the Evening Star.

といった文は、いずれも正しい真の文である。これらは全て、言語表現AがAであるという自然の摂理を述べている文である。そして、(3)を多少変えて、

- (4) The Evening Star is the Morning Star.

としてみても、この文が真であるという条件が成立する。即ち我々は、the Evening Star が the Morning Star と同一指示物を指すことを知識としてすでに

知っており、表現が異なっている、この文で表わされる内包と外延が同一の物であるという知識を共有しているのである。しかし、これが necessarily で修飾され、

(5) Necessarily the Evening Star is the Morning Star.

となったならば、この文は偽となる。何故なら、the Evening Star と the Morning Star は、我々の存在している現実世界における指示対象すなわち外延は金星という惑星であり、同一のものを指す。しかし、それはたまたまそういうことが天文学において発見されただけのことであり、世界の有り様や状況が異なれば、the Evening Star と the Morning Star という二つの表現は、その現実とは異なった世界で全く異なる指示対象を持つことも十分に考えられ得る。つまり、これらは現実世界での指示対象物は同一であるが、表現の有する意味は異なっていると考えることが出来るし、あるいは、現実世界における外延は同一であるが内包が異なっていると考えることも出来る。内包が異なっていれば、異なる状況や世界で異なる指示物を持つことが可能になるのであり、(1) の文における同一性は偶然の産物であり、偶然の事実をもって必然とする (2) の文は、意味的に不自然な文であると感じられるのである。

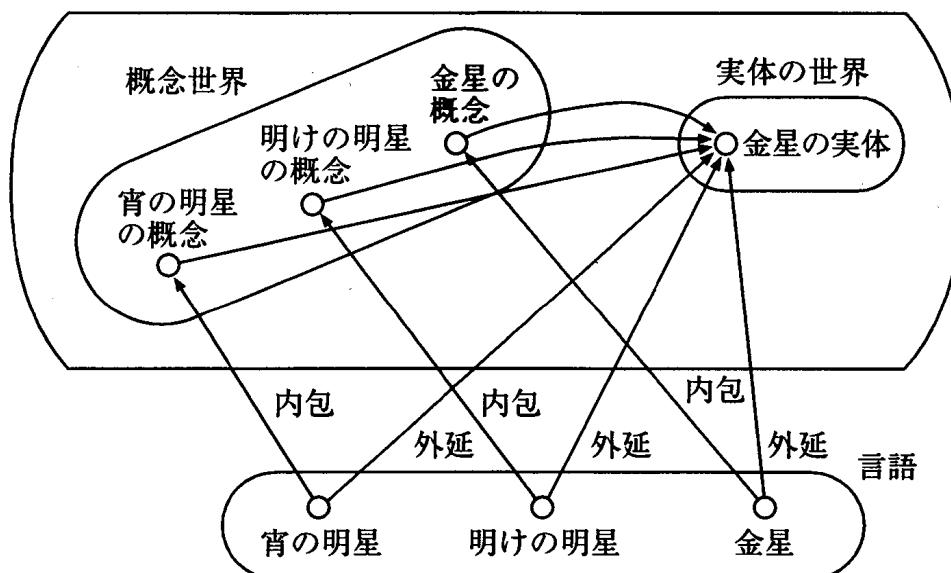
そして「内包」と「外延」の説明としてよく用いられるのが、「明けの明星」と「宵の明星」の解釈の問題である。この言葉は両方とも外的可能世界における「金星」を指し、これが言葉の実体（すなわち「外延」）となる。「明けの明星」の指す実体と「宵の明星」の指す実体は共に等しいものであるが、この二つの言葉の指す概念（すなわち「内包」）は共に異なっている。このように、内包と外延といった概念を、「可能世界」と呼ばれる多くの意味の世界の中で考えて、内包とは、各可能世界に対して一つの外延を対応させる写像または関数であると定義するような論理体系が内包理論である。Montague 文法は、こうした内包理論の枠組みを用いて自然言語の表現を内包理論の用語に翻訳し、その上で論理式としての自然言語の意味を追求しようとする意味理論に他ならない。

この「内包」と「外延」の関係は、図6のように示される。

- 5) Katz & Fodor らに端を発する生成文法を基盤にした意味論の対極に位置するものが、論理学者・哲学者であった Richard Montague による「モンタギュー文法 (Montague Grammar [MG])」であり、そこで採用されるような意味研究を「形式意味論 (Formal Semantics)」と呼ぶ。形式意味論とは、記号論理の成果を取り入れ、それを自然言語の意味論とするために、様々な改良や変更を加えた形で意味論を構築する研究の総称である。Montague 文法は、Montague が 1960 年代から 1970 年代初頭にかけて発表した論文に端を発する。その中で彼は、論理学における形式言語と個別言語における自然言語の間には本質的に差異はなく、自然言語にも形式言語のそれと同等な統語論と意味論を付与することが出来ることを主張し、英語の一部に関して非常に厳密か

図6

世界



(横山晶一・内田裕士「自然言語の理解」

塚本克治編『AI 情報処理から知能処理へ』p.171.)

つ数学的な形式理論を展開した。この理論は、“表現の意味は、それが現実世界において指示するものである”という考え方を採用し、“ある表現全体の意味は、その表現を構成する部分の意味とそれら部分の結合様式のみから決定され得る”という「構成性の原理 (Principle of Compositionality)」(または「フレーゲの原理 (Frege's Principle)と呼ぶこともある」)を基本に置く。これは、言語学において自然言語が「有限の手段で無限の文を作り出す記号体系である」と考えられる以上、このような原理を自然言語の意味論に取り込むことは有意義であると考えられる。そしてこの原理は、後に起こってくる認知言語学との結び付きを強める接点ともなるものである。

自然言語の意味的側面は、その形式上の側面に比べると、極めて曖昧で捉え所がなく、従来の言語学では、その実質的な研究は音韻論や統語論が先行してきた。その一方で、述語論理等の形式言語を対象としてきた論理学では、その言語の統語論と並行した形で、その言語の意味論も厳密に規定した。そこで採用された規定を自然言語に応用し、論理哲学と自然言語の意味論研究の橋渡しを試みたのが Montague である。そしてその理論は今日に至るまで、その後の様々な意味論の中心的な一研究としての地位を得ることになる。とりわけ、“*The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English*” (普通英語における限量化の適切な扱い方)で採用されている意味の分析方法が、その頭文字を略して、PTQモデルの名で一般に流布している。



形式意味論は、「真理条件意味論 (Truth Conditioned Semantics)」、「モデル理論意味論 (Model-Theoretic Semantics)」、「可能世界意味論 (Possible Worlds Semantics)」という三つの意味研究をその中心に置いている。

真理条件意味論とは、叙述文の意味解釈を行うために、その文が真であるためには当該文が記述しようとする世界または状況が満たしていなければならない真理条件 (truth condition) がどのようなものであるか規定することである、とするものである。この考え方の基本にあるのは、言語表現は解釈を与えられることによって世界とのつながりを保たなければならないというもので、文は解釈されることによって、それが真となる世界の有り様が明示的に規定されなければならないとするものである。

可能世界意味論とは、文の意味解釈に当たって、その文が発話される際に我々が置かれている実際の与えられた特定の状況のみならず、このような世界の有り様とは異なる、論理的に可能な世界の有り様との関連においてその意味を考えていこうとするものである。可能世界とは、論理哲学の意味論での形式的な道具であり、世界の実際の有り様に対する代案としての可能性を、形式上、モデル化したものである。ここで問題になるのは、我々を取り巻く現実の世界そのものではなく、世界の構造ということになる。

モデル理論意味論とは、自然言語の表現を、集合論的な解釈と公式によって表現と意味とのつながりを解明しようとするものである。従って言語表現は、世界の中に存在する何らかの構成体に対応付けられることになる。この対応付けが行われるためには、そこで世界を形式的に構成する明確な枠組みが必要となる。そこで、自然言語表現の指示対象あるいは意味として、集合論的に規定され得るモデルが構築される。そうして自然言語の表現が意味解釈されて、最終的には世界の中に存在するモデルに対応されることになる。こうした意味解釈のためのモデル構築を付与する理論がモデル理論意味論である。

この三つの柱を基に意味の解明を行うのが形式意味論である。そこでは、意義と指示の対立概念を、論理学の用語である「内包 (intension)」と「外延 (extension)」という語で表わす。古典的には、内包は表現の意味や概念といった表現に備わる実体と解釈されてきたか、あるいは言語使用者の頭の中に存在する心理的実体として曖昧な形で認識されてきた。しかし形式意味論の世界においては、内包とは可能世界とその世界における外延を一義的に結び付ける仕組みである。一方、外延とは、集合論的に捉えられる対象となる指示物の要素の集まりを指す。

一般にある表現の内包は外延よりも意味的に強力である。内包が存在することによって、特定の可能世界での外延が決定され得るが、その逆はあり得ない。そしてそこで構成される文とは、不可分の意味概念ではなく、構成要素の意味と統語構造から合成的に得られるものであると考える。言い換えれば

ば、個々の語は単独で独立した意味上の「位置」を占めるのではなく、他の語や意味との何らかの関係において意味的機能を果たしているという考えである。

- 6) 「手」の意味認識については、松中(2002:144-145)において、図8に見るように、更に細かく分析を試みている。そこでは、*NODE*における意味記述と同様に、中心に「手」の多義的派生関係を生み出す共通の概念認識を設け、そこから機能的派生と形態的派生の二つの拡張が生まれる関係を明らかにした。

機能と形態という二つの派生関係は成瀬と同様であるが、松中(2002)ではそこから更に下部概念としての語義と表現例をまんべんなく網羅し、メタファー、メトニミーといった認知的枠組みから、多義の意味拡張と有契性の原理を、細部に渡って実証することに成功した。

この中心的な概念認識の設定は、有限の言語形式で無限の意味を表現し、理解し得る我々の意味認識がどのような原理に基づいて行われているかという、人間の心内における意味理解のプロセスの解明に役立つものである。

- 7) 「ゲシュタルト(Gestalt)」とは「形態」という意味であるが、ここでは、各構成要素が有機的に関わり合い、一つの単位を構成し、それによって機能を果すまとまりを持った全体を意味する概念として用いられる。認知言語学は、ゲシュタルト心理学における中心的主張である、「全体は部分の総和以上のものである」という考えを基盤に置く。これは換言すれば、①全体的構造の方が、部分的構造よりも知覚されやすい、②部分は全体を踏まえて概念化される、ということに他ならない。これは、例えば、テレビの画面に映し出される映像や、新聞紙上の人物写真等を思い浮かべれば、ここで述べている主眼点が推測され得よう。つまり、テレビ画面の映像や新聞の人物写真は、細かくその細部にまで視点を移すと、それを構成している一つ一つの要因は赤、青、緑の光の粒子の集まりであったり、インクの黒い点の集まりである。しかし、我々は通常、こうした一つ一つの構成要素を気に止めることもなく、それが映し出す全体としての映像、あるいは人物写真といった構造を認識している。つまり、人間の認識は、部分を知覚している場合であっても、常にその全体を前提としているものであり、各部分、各構成要素はその全体の構成の中にどのように位置付けられるかによって規定されるのである。

この例として、図7を見てほしい。ここでの各部分、各構成要素は音符であるが、我々はそれを部分として知覚すると同時に、全体としての車の像を認識するであろう。しかし我々は、各構成要素としての音符よりも先に、全体としての車の認識の方を、より速く、かつより容易に行うはずである。

このことから得られる現象は、個体を超えた全体性というものは、個体を総合することで得られるものではなく、逆に知覚においては全体こそが部分の前提になると考えられるということである。こうした構成要素は、全体に

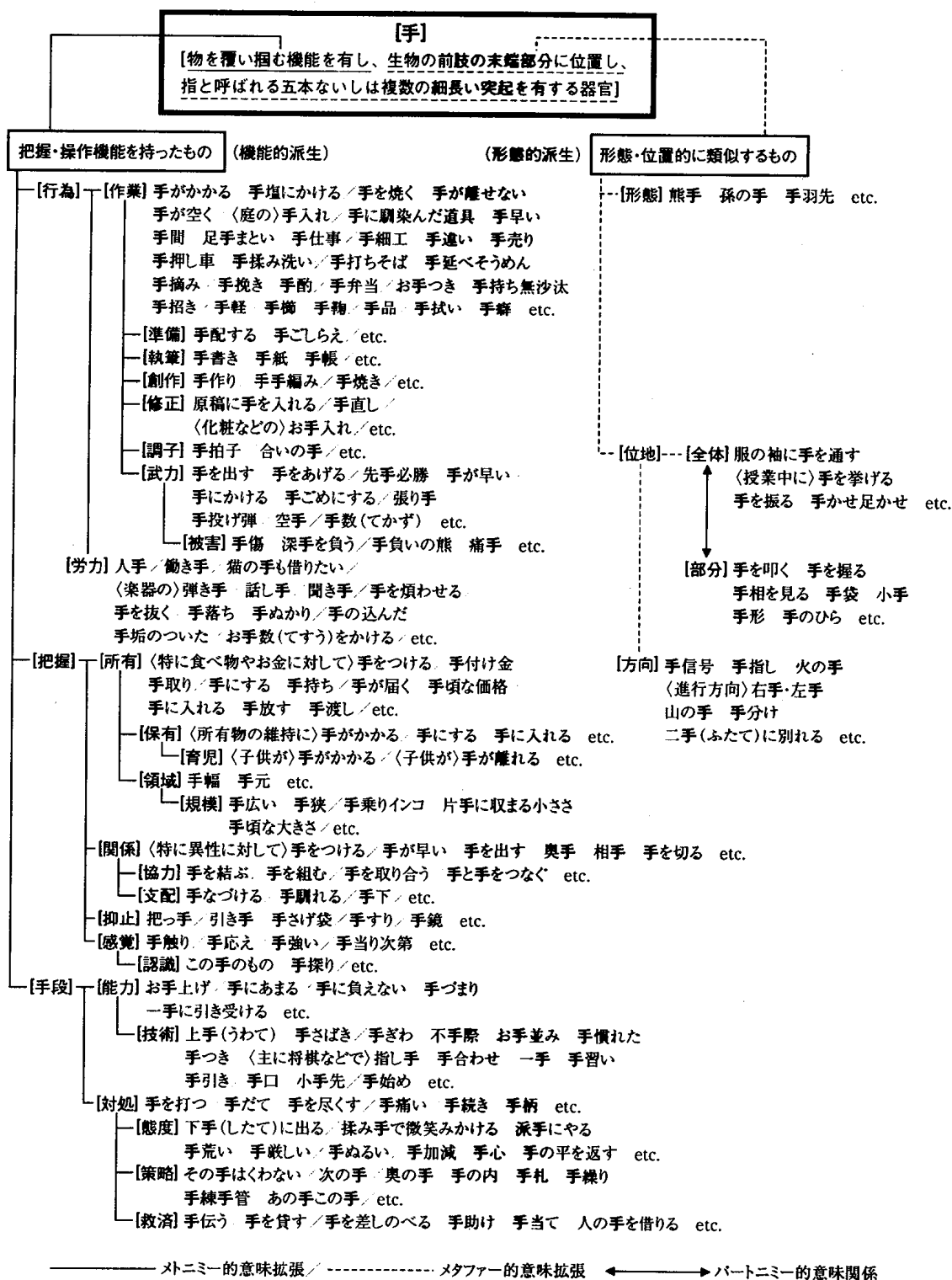
図 7



—— *Pioneer* の広告より

埋め込まれた以上、単なる要素としてではなく、一つのゲシュタルトを構成する全体の中の部分として有機的に機能するものであり、またそのように認識されるものである。この考え方が、従来の意味論、特にそれは形式意味論においてであるが、そこにおいて見られた「構成性の原理 (Principle of Compositionality)」に拮抗する形で、自然言語の意味の解明に重点を置き、言語研究の足掛かりとなったのである。「構成性の原理」とは、「ある表現全体の意味は、その表現を構成する部分の意味とそれら部分の結合様式のみから決定され得る」という、いわば部分の意味が全体の意味の総和であるとする考え方であることは、本論文の注5でも述べた通りである。これはゲシュタルト心理学の、部分は全体を踏まえて概念化されるという主張と相反する考え方であるが、こうした経緯を辿って、ゲシュタルト心理学と言語学が結び付き、人間の認知と言語理解を解明しようとする認知言語学が誕生することとなるのである。

図 8



## 引用・参考文献

- 阿倍純一・桃内佳雄・金子康朗・李 光五編. 1994. 『人間の言語情報処理』サイエンス社.
- Barwise, Jon.・Perry, John. 1983. *Situations and Attitudes*. Massatussetts: The MIT Press. (土屋 俊・鈴木浩之・白井英俊・片桐恭弘・向井国昭訳. 1992. 『状況と態度』産業図書.)
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass: MIT Press. (安井 稔訳. 1970. 『文法理論の諸相』研究社.)
- Fillmore, Charles. 1966. Toward a Modern Theory of Case. In *Project on Linguistic Analysis 13*. pp.1-24. Ohio State, Colombus: Reibel and Schane.
- Fries, Charles. 1954. Meaning and Linguistic Analysis. In Bloch, Bernard. ed. 1954. *Language 30*. pp.57-68. New York: Kraus Reprint Corporation.
- Fries, Charles. 1952. *The Structure of English*. New York: Harcourt Brace.
- Gruber, Jeffrey. 1965. *Studies in Lexical Relations*. Cambridge, Mass.: Thesis Massachusetts Institute of Technology.
- Gruber, Jeffrey. 1976. *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North-Holland Publishing Co.
- 池上嘉彦. 1975. 『意味論 意味構造の分析と記述』大修館書店.
- Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: G. Allen & Unwin. (半田一郎訳. 1958. 『文法の原理』岩波書店.)
- 松本裕治・影山太郎・永田昌明・斎藤洋典・徳永健伸編. 1997. 『岩波言語の科学3 単語と辞書』岩波書店.
- 松中完二. 2002. 「現代の多義語の構造」 飛田良文・佐藤武義共編. 2002. 『現代日本語講座 第4巻 語彙』 pp.129-151. 明治書院.
- 松中完二. 2003. 「翻訳と文化」『敬愛大学 研究論集』第63号、pp.57-107. 敬愛大学経済学会.
- 松中完二. 2004. 「意味認識の原理についての認知的考察—「場面」と「文脈」の観点から—」『敬愛大学 研究論集』第66号、pp.51-98. 敬愛大学経済学会.
- Montague, Richard. 1974. *Formal Philosophy: Selected Papers of Richard Montague*. New Haven: Yale University Press.
- 成瀬武史. 1978. 『翻訳の諸相—理論と実際—』開文社出版.
- Nida, Eugene.・Brannen, Noah. 1969. *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: Published for the United Bible Societies by E. J. Brill. (沢登春仁／升川 潔訳. 1973. 『翻訳—理論と実際』研究社出版.)
- 野崎昭弘. 1987. 「モンタギュー文法について」水谷静夫教授還暦記念会編. 1987. 『計量国語学と日本語処理』 pp.247-256. 秋山書店.

- Saussure, Ferdinand de. 1916. *Cours de Linguistique Générale*. Paris. (小林英夫訳. 1972. 『一般言語学講義』岩波書店.)
- 白井賢一郎. 1985. 『形式意味論入門—言語・論理・認知の世界』産業図書.
- 白井賢一郎. 1991. 『自然言語の意味論—モンタギューから「状況」への展開』産業図書.
- Stevenson, Charles. 1944. *Ethics and Language*. New Haven: Yale University Press. (島田四郎訳. 1976. 『倫理と言語』内田老鶴圃.)
- 田中茂範・深谷昌弘. 1998. 『〈意味づけ論〉の展開』紀伊國屋書店.
- 塚本克治. 1988. 『AI 情報処理から知能処理へ』アスキー.
- Ullmann, Stephan. 1962. *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell. (池上嘉彦訳. 1969. 『言語と意味』大修館書店.)
- Winograd, Terry. 1983. *Language as a Cognitive Process*. Mass.: Addison Wesley Publishing Co.
- 横山晶一・内田裕士. 1988. 「自然言語の理解」塚本克治編. 1988. 『AI 情報処理から知能処理へ』pp.161-188.アスキー.
- Yule, George. 1985. *The Study of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (今井邦彦・中島平三訳. 1987. 『現代言語学20章—ことばの科学』大修館書店.)

## 辞書資料

- 松村 明監修. 1995. 『大辞泉』小学館.
- Pearsall, Judy. ed.・Hanks, Patrick. Chief Edt. 1998. *The New Oxford Dictionary of English*. Oxford: Clarendon Press.

## 漫画資料

- 安達 哲. 1993. 『お天気お姉さん』第3巻、講談社.
- 井上雄彦. 1999. 『バガボンド』第1巻、講談社.
- 高森朝雄・ちばてつや. 1985. 『明日のジョー』第10集、講談社.
- 鳥山 明. 1995. 『Dr.スランプ』第2巻、集英社文庫.